

神の前に正しくあり得るのか

ヨブ記 8-10 章

はじめに

毎月第四主日の説教は、旧約聖書からすることになっています。私が旧約聖書から説教をする時は、「ヨブ記」からしています。今日は、8-10章に書かれている内容から学びたいと思います。

1. ヨブの試練と信仰

ヨブという人は、誠実で直ぐな心を持ち、神を恐れて悪から遠ざかっている人でした。神様は、そんなヨブを祝福して、多くの財産と多くの子ども（10人）を与えられました。

しかしそんなヨブに、サタンが目を留めて、神様にこう言います。「ヨブは、あなたに祝福されて、多くの財産と多くの子どもが与えられているから、あなたを恐れているのです。もし財産と子どもを失えば、きっとあなたを呪うに決まっています」。

そこで神様はサタンに、ヨブの財産と子どもを奪うことを許可しました。するとヨブは、犯罪や自然災害に巻き込まれて、一日のうちに、財産と子どもをすべて失ってしまうのです。

しかしヨブは、そのような試練の中でも、決して神様への信仰を失いませんでした。彼は、神様を礼拝してこのように言います。「**私は裸で母の胎から出て来た。また裸でかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな**」(ヨブ記 1:21)。

するとサタンはもう一度、神様にこう言います。「ヨブは、財産と子どもを奪われても、健康が与えられているから、あなたを恐れているのです。もし健康を失えば、きっとあなたを呪うに決まっています」。

そこで神様はサタンに、ヨブから健康を奪うことを許可します。するとヨブは、足の裏から頭のとっぺんまで、悪性の腫物で侵されるのです。夜眠れないほどの痛みがあり、やせ細っていきます。内臓も侵され、それが原因で体から悪臭が出るようになりました。その結果、人々からも嫌われるようになります。そして妻からも、「**神を呪って死になさい**」(ヨブ記 2:9)と見捨てられ、妻は神様への信仰を捨てていきます。

しかしヨブは、そのような試練が続く中でも、神様への信仰を失いませんでした。彼は、妻に向かってこのように言います。「**あなたは、どこかの愚かな女が言うようなことを言っている。私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわざ受けるべきではないか**」(ヨブ記 2:10)。

2. シュアハ人ビルダデの信仰

ヨブには、三人の友人がいました。テマン人エリファズ、シュアハ人ビルダデ、ナアマ人

ツォファルの三人です。彼らは、ヨブが非常に苦しい試練の中にあると聞いて、ヨブを慰めに駆けつけて来たのです。彼らは最初、ただヨブのために涙を流し、一週間一言も語らずに、ヨブのそばに寄り添い続けたのです。

しかし三人の友人は、ヨブが自分の心の中にある苦しみを語り始めた時から、態度が変わってきます。ヨブは死を願うほど苦しんでいました。神様がなぜ自分をこのような苦しみに遭わせるのか、その理由が分からずに苦しんでいたのです。

三人の友人は、ヨブの試練の原因を「因果応報」の原理で解釈して、ヨブを教え導こうとします。「因果応報」とは、人は必ず自分の行いによって報いを受けるというものです。善いことをした場合は褒美を受け、悪いことをした場合は罰を受けるというものです。この「因果応報」の原理は、時代と文化を越えて、すべての人間の心の中にある原理です。これは、神様が人間の心に植え付けられたものです。この「因果応報」の原理があるからこそ、人間社会の秩序は保たれてきたという面があります。

三人の友人は、ヨブの試練の原因は、ヨブの罪にあると考えます。そしてヨブがもし、その罪を認めて悔い改めるなら、神様の祝福を取り戻せるはずだとヨブを教え導くのです。

8章には、シュアハ人ビルダデの言葉が書かれていますけれど、ビルダデは4-6節でこのように言います。「もし、あなたの子らが神の前に罪ある者となり、神が彼らをその背きの手に渡されても、もし、あなたが熱心に神に求め、全能者にあわれみを乞うなら、もし、あなたが純粹で真っ直ぐなら、いますぐ神はあなたのために奮い立ち、あなたの義の住まいを回復されるだろう」。

ビルダデは、ヨブの子どもたちの命が奪われたのは、ヨブの子どもたちの罪が原因であると考えます。そしてヨブに、熱心に悔い改めるように、もしヨブが熱心に悔い改めるなら、神様は必ず祝福を回復してくださるはずだと言うのです。

ビルダデは、8節で「さあ、先人に尋ねよ。先祖たちの探求したことを確かめよ」と言っているように、ビルダデは「因果応報」の原理を先祖たちから学んだのです。そして先祖たちから学んだ「因果応報」の原理で、神様を解釈したのです。だからこそ20節で、「見よ。神は誠実な人を退けることはなく、悪を行う者の手を取ることはない」と言うのです。

私たちクリスチャンは、聖書で神様を解釈します。聖書を通して神様という方を知ります。しかしビルダデは、先祖たちから学んだ「因果応報」という原理で神様を解釈したのです。神様を「因果応報」という原理に閉じ込めてしまったのです。そして神様の御業も、私たちの人生に起こるすべての出来事も、「因果応報」の原理で説明できると考えたのです。

聖書を見れば、神様は「因果応報」の原理の中に収まる方ではありません。神様は、「因果応報」の原理よりも大きな方です。神様は確かに、善い行いに報い、悪い行いを罰する方です。その意味で正義の方、義なる方です。しかし神様は同時に、愛と恵みに満ちた方です。

神様は、正義と恵みを両立させる方です。私たち人間は、アダムとエバが神様の命令に背いて、禁断の木の実を食べた時から、罪の性質を持つようになりました。罪とは、神様の命令に背くことです。私たち人間はすべて、罪の性質を持ち、神様の命令に完全には従えないので、神様に裁かれなければなりません。しかし神様は、私たちを愛し、私たちの罪のため

に神の子であるイエス様を十字架に付け、私たちの罪を償わせました。イエス様は、私たちの代わりに神様に裁かれました。またイエス様は、私たちの代わりに神様の命令に完全に従われました。神様は、イエス様を神の子、救い主と信じる者を救われます。神様は、イエス様の十字架において、正義と恵みを両立させたのです。イエス様を信じる私たちは、神様の御前に義と認められ、すべての罪が赦され、神様の御前に正しい者とされています。

3. ヨブの苦しみ

ヨブも神様の恵みによって救われ、神様の御前に正しい者とされた人です。9-10章には、ヨブの言葉が書かれていますけれど、その中で、自分は「正しい」「誠実である」「潔白である」「悪しきことがない」と言っていますが、決して自分には罪が全くないと言っているわけではありません。確かに神様も、ヨブのことを「**彼のように、誠実で直ぐな心を持ち、神を恐れて悪から遠ざかっている者は、地上には一人もいない**」(ヨブ記 1:8)と言っていますが、ヨブに罪が全くないと言っているのではありません。ヨブもアダムとエバの子孫ですから、罪の性質を持っているのです。ヨブは、罪のために全焼のささげ物を献げていたとありますから(ヨブ記 1:5)、ヨブは罪の贖いをしていたのです。ヨブは信仰によって救われ、神様の御前に正しい者とされた人でした。そしてその恵みに応えて、誠実に生きて、神様を愛し、罪から離れて生きていたのです。

しかしそんなヨブが突然、財産と子どもを失い、健康も失い、妻の信仰も失うのです。ヨブにはそれがなぜだか分かりません。ヨブは、神様とサタンのやり取りは知りません。この試練の目的は、ヨブがすべてを失っても神様を愛し続けるかどうかを試すものであることを、ヨブは知りません。三人の友人たちは、「因果応報」の原理で、ヨブの罪に原因があるのだと的外れな解釈をしてヨブを苦しめます。そして、悔い改めろ、悔い改めろとヨブを責め立ててきます。ヨブには自分を理解してくれる人がいません。神様も沈黙しておられます。

そのような中で、ヨブは次第に神様に不信感を抱いていきます。9-10章には、ヨブの神様に対する不信感に満ちた言葉が書かれています。しかしすべてが不信感に満ちた言葉ではありません。ヨブは、神様が全宇宙と全世界を造られ支配しておられる方であること、自分を含めた人間を造られたことを信じています。しかしなぜ自分がこのような激しい試練を経験しなければならないのかが分からないのです。

自分には罪が全くないとは思わない、しかし神様が私を恵みによって救い、私を正しい者と認めてくださったのではないですか、私は神様の愛と恵みに応えて、誠実に生きて、神様を愛し、罪から離れて生きてきた、どう考えてもこのような激しい試練を経験しなければならないほどの大きな罪を犯してはいない、神様なぜですか、なぜ突然手のひらを返したように恵みを取り去られたのですか。ヨブは神様と言い争いたいとさえ思ったのです(ヨブ記 9:3)。

おわりに

ヨブは9:32-33で、このように言います。「**神は、私のように人間ではありません。その方に、私が応じることができるでしょうか。『さあ、さばきの座に一緒に行きましょう』と。私たち二人の上に手を置く仲裁者が、私たちの間にはいません。**」ヨブは、神様と言い争いたいと思いました。なぜ神様がこのような激しい試練を私に与えるのか。しかし神様は沈黙しておられる。それなら、自分と神様の間に入ってくれる仲裁者がほしいと願うのです。

ヨブはこの時、自分にはその仲裁者がいないと言いました。ヨブにはまだイエス様がはっきりと見えていなかったのです。私たちと神様との間の仲裁者は、イエス様です。イエス様は、私たちと神様の間に入り、私たちと神様の関係を導いてくださいます。そのためにイエス様は、神であられる方なのに人となられたのです。真の神であり、真の人であるイエス様こそ、私たちと神様との間の唯一の仲裁者です。

私たちも人生において、あらゆる試練を経験します。神様なぜですかと言いたくなるような苦しみも経験します。神様の愛を疑うほどの苦しみを経験することもあります。しかし私たちは、そのような時に仲裁者であるイエス様から目を離してはいけません。使徒パウロは、このように言いました。「**私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるでしょうか**」(ローマ 8:32)。神様は、御自分の最も大切なひとり子イエス様を私たちに与えてくださった方です。その神様が、私たちを愛していないはずはない。必ず何か意味があるはずだ、必ず導いてくださるはずだ、とパウロは言うのです。

またパウロは、このようにも言います。「**だれが、私たちをキリストの愛から引き離すのですか。苦難ですか。苦悩ですか。迫害ですか。飢えですか。裸ですか。危険ですか。剣ですか。…私はこう確信しています。…私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません**」(ローマ 8:35、38、39)。神様の愛は、イエス様によって示されました。私たちは、その愛から決して引き離されることはありません。

私たちの人生において試練を経験する時、イエス様から目を離してはいけません。神様の愛を疑いそうになる時、私たちのために十字架で命を献げてくださったイエス様を思い出さなければなりません。キリスト教は、神様をイエス様によって解釈するのです。使徒ヨハネはこう言いました。「**いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである**」(ヨハネ 1:18)。

また私たちは試練を経験する時、「因果応報」の原理が私たちを責め立て、苦しめることがあるかもしれませんが。私たちに罪がないわけではありません。私たちはいつも、絶えず自分の罪を認めて悔い改めなければなりません。しかし私たちには、私たちの罪を十字架で完全に償ってくださった仲裁者イエス様がいてくださるのです。私たちは自分の罪を認めて悔い改めて、イエス様の贖いに信頼して、大胆に神様の恵みの御座に近づけばよいのです。

私たちが不安になる時、迷う時には、イエス様の姿を思い出すべきです。イエス様が私たちを神様のもとへ、そして正しい道へ導いてくださいます。

天におられる主なる神様。

私たちの人生においては、様々なことが起こります。神様なぜですかと問いたくなることや神様の愛を疑ってしまうこともあります。しかしどうか、私たちがイエス様から目を離さないでいられますように。イエス様を通して神様を見上げることができますように。イエス様は、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません」(ヨハネ 14:6) と言われました。どうか、不安な時、迷う時は、あなたが神様のもとへと導いてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。